

## ■ 対ユーロ&amp;対円でドル高傾向ジワリ強まる！

ここ数日、金融市場には全般にややリスク回避的なムードが漂いはじめている。その実、昨日（27日）のNYダウ平均は一時的にも700ドルを超える下げ（前日終値比）を演じ、最終的に633ドル安で引けた。

米国の追加経済対策案を協議するプロセスにおいてまだまだ紆余曲折がありそうなことや、新型コロナウイルスワクチンの拡大に関して幾つかの見込み違いが生じている点などが背景にあるとされているものの、やはり最大の問題はトランプ前大統領に対する弾劾訴追決議を上院に送ったことであると言えよう。

裁判は2月8日の週に開始予定とされるが、この時期というのは、米大統領に就任したばかりのバイデン氏にとって「100日間のハネムーン期間」という極めて重要な時間帯の最中にあたる。この限られた大事な時間の多くを「有罪の可能性が低い弾劾裁判などに費やすのは時間の浪費以外の何物でもない。結果、最重要な追加経済対策案の協議が遅れる可能性さえあるというのだから、市場のムードがリスク回避的になるのも無理はない。もっとも、足下では裁判の実施が見送られる可能性も高まっており、そうなれば市場のムードも再び変化しよう。

むろん、この「100日間」に期待するところは大きい。なにしろ、バイデン米大統領は「春までに希望者全員のワクチン接種が可能になる」との見通しを明らかにしている。希望的観測も多少はあるが、他の主要国に比べればかなり踏み込んだ姿勢であると言える。

その一方で、目下の欧州がワクチン供給の遅れに苦慮しているという事実は実に重い。

一昨日（26日）、一部通信社が関係者の話として「欧州中央銀行（ECB）はFRBとの政策の違いが為替レートに与える影響を調査する」と伝えた。米国経済の方が強いにも拘らず、ドルが弱いことが疑問だというのである。御説ご尤もと言えるだろう。

兎にも角にも、これからは各国・地域におけるワクチン拡大のスピードが何よりモノを言うようになる。ワクチン拡大のスピードは景気回復のスピードに直結するし、それが外国為替相場にも当然のことながら大きく影響するのである。

その意味からしても、足下の日本政府の対応は正直、残念としか言いようがない。英データ会社の予測によると、日本が集団免疫を獲得するのは10月頃になるという。本来であれば、五輪を開催する国として真っ先にワクチンの拡大に尽力すべきだったのではないのか。

こうしたことから考えて、本来的にドルはユーロや円よりも強くあっていいし、ユーロは円よりも強くあっていい。欧州でワクチン普及が計画より遅れていると心配されているが、日本ではいまだにワクチンの接種が始まってもおらず、そのことの方がよほど深刻である。

前回更新分の本欄でも触れたように、ユーロ／ドルはここ暫く一目均衡表の日足「雲」上限に下値を支えられていたが、昨日は同水準を下抜けている。

これをクリアに下抜けると、次はやはり直近（1月18日）安値の1,2053ドル、そして1,2000ドルの節目が意識されやすくなるだろう。なお、そのすぐ下方には89日移動平均線（89日線）や日足「雲」下限の存在もあり、当面はそれらの節目をも意識した展開が続いておかしくないと思われる。

一方、ドル／円は昨日、これまで長らく強い上値抵抗となっていた日足「雲」下限の水準を上げ、さらに本日は89日線（現在104.33円）や日足「雲」上限（現在104.31円）を試す展開となっている。これらをクリアに上げた場合には直近高値の104.40円、昨年3月高値から今年1月安値までの下げに対する23.6%戻し＝104.74円、昨年11月高値＝105.68などを順に試す可能性もあると見ておきたい。

市場では米・日株価について「2月警戒論」も根強い。決算発表が一巡すると、目先の材料不足と高値警戒感から一時調整局面を迎える可能性も大いにある。その場合、一時的に「リスク回避のドル買い」とされる動きが強まっておかしくない。（01月28日 10:15）